

久留米入城400年記念  
京町校区の見どころ知りどころ  
第7回 眞木和泉守と水天宮

連載の第7回は、水天宮の宮司にして、幕末の勤皇志士・眞木和泉守（まきいずみのかみ）について紹介します。

話し手の吉田洋一さん（久留米大学文学部教授）は、江戸時代の学問や教育が専門で、眞木和泉守研究会にも参加し、大学などで和泉守に関する講演もされています。

Q. 水天宮には、久留米藩よりも長い歴史があります。

（吉田） 壇ノ浦の戦い（1185年）の後、筑後川辺りの鷲野ヶ原（さぎのがはら）に逃れた按察使局（あぜちのつぼね）が、1190年に水天宮を祀ったのが始まりとされています。按察使局は、安徳天皇の母・平徳子（建礼門院）に仕えた女官で、平知盛の孫・平右忠（すけただ）を養子としました。この右忠が、初代水天宮宮司となります。

1650年、久留米藩2代藩主有馬忠頼（ただより）が、社地・社殿を寄進して、現在地に遷されました。

Q. 第22代宮司・眞木和泉守とは？

（吉田） 1813年生まれ、長男で、11歳の時、父旋臣（としおみ）を亡くして宮司となります。早くから討幕の思想を持ち、若き10代藩主頼永（よりとお）に藩政の改革を働きかけました。

しかし頼永が急死、藩内抗争の結果、幽閉の処分を受けます。水田天満宮（現・筑後市）での塾居生活は約10年にも及びましたが、和泉守の志は固く、討幕のため挙兵して禁門の変に敗れ、天王山で自刃しました。時代の転換点である幕末維新期において、新時代の魁（さきがけ）となった代表的な人物です。

Q. 水天宮で、和泉守の足跡をたどるには？

（吉田） 第一の鳥居をくぐって参道を進むと、右手に「眞木神社」、「山梶窩（くちなしのや）」（復元）、「眞木和泉守保臣先生銅像」が並びます。

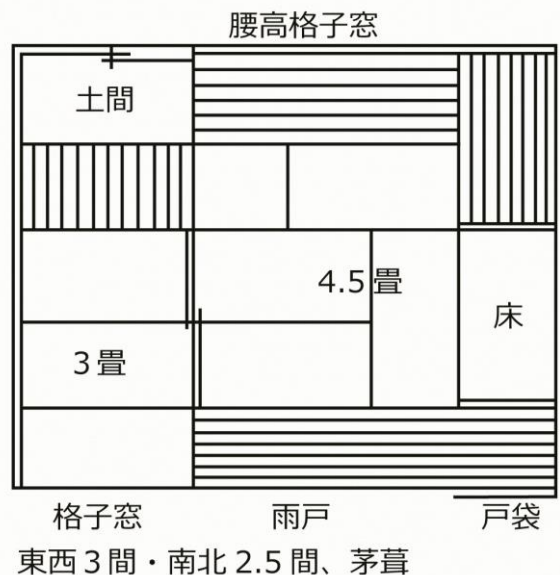


右：山梶窩（水天宮境内）  
下：山梶窩の間取り図

和泉守を祀り、社殿前の石碑には和泉守とともに自刃した同志の名が刻まれています。

山梶窩は、和泉守が塾居の際、水田天満宮の一隅に建てた庵（いおり）です。現在も同じ場所に残り、福岡県指定文化財です。それを模した建物が、水天宮の境内に復元されています。

銅像は、昭和戦時期の金属供出で台座のみ残り、昭和43年に再建されました。力士に間違われるほどだった壮健な姿を良く表しています。



Q. 見どころ知りどころは？

（吉田） 4畳半と3畳からなる簡素な造りの山梶窩で、和泉守は自炊の生活を送り、しばしば水天宮の家族に手紙を送っています。また、志ある青年たちを教育し、諸藩の志士の来訪を受けて、討幕決起に備えていたことなど、当時の和泉守の日記などからうかがうことができます。

山梶窩の前に立つと、和泉守の慎ましやかな暮らしぶりと、揺るぎのない志が偲べれます。（聞き手・市文化財保護課 穴井）